

Curry on a conversation

田中瑞穂

40 字 × 30 行 : 22 枚 原稿用紙換算 : 58 枚

作品概要

登場人物

京子

正史

おじさん

中学生

京子と正史はわかりあえないながらも話をする。

正史は映画制作をしようと行動をとる。

正史は映画の取材の過程で、カレーショップでおじさんと中学生の話を聞く。

おじさんと中学生はいる。

おじさんと中学生…アイスこねくった手でよく触るから、真夏の眼鏡に豊かな生態系のさばる。母の海が生臭さに充ちる。真緑、不潔と映るは煌びやかな母の海。南洋の貧しさの巢窟、廃棄物処理の臨場感に高温多湿は想像してみる。どこにいても腐敗臭から逃がれられん、どこにいても薬品の刺激臭から逃がれられん。動物の腐った肉と化学的高分子の薬物反応で鼻がツンとする。ツンどころでないのね、ツンね、暖かいところはまだぜんぜん人生をだいぶまだ謳歌できる場所で、緯度が高ければ高いほどに徹底的に命を刈り取られるので、ツンドラ気候で人間やめた労働にあけていたら、栄養失調で、氷点下すごいことで、凍傷になって手足二十本の指ことごとくが壊死しちゃえば神経が麻痺したりもするから、指が朽ち落ちるとかもうよくわからんくなる、歯茎はただれて、歯はするりと抜け落ちる。鏡でねつとりと自分の顔を観察し尽くしたなら鏡に映るのが、自分なのかどうなのかよくわからなくなつて、自分だと思うビジュアルがそこに見出せやん、自分なのに自分だと理解できんくなり、誰かさんだ、と。その誰かさん、に対して毎日見ると愛着なんとなしに沸いてきて、情が入ってくる。うん、誰かさん、は誰かさん、に似とる。うん、いける誰かさん、だ。いける誰かさん、は魅力が強いので人々を惑わすので拘禁される。プリズン生活の気苦労で気がふれるのも仕方がなく、お天道のお告げがわんさかやってきて、囚人が折檻されての叫び声に、哀悼の念が湧き起こり、かわいそうでむせび泣く。それからというもの、人を悲しませたりする現世の万物、ありとあらゆるものに対して、全身全霊で反発することをしようとする。それを厳しく監視する監守は、鬱憤ばらしとばかり、見せしめに丁度いいやと、縄で吊るす。監守が反乱分子を嗅ぎ付けるときに発揮する鼻の良さはとことんお見事なもので。抵抗するほど、縄が皮膚を裂く。食い込む縄はささくれ立ってるし、痛点とランデブーする。痛いところをピンポイントで刺激してくるのでお見事。中南米のよくある拷問は、このような仕打ちに比べればお遊びみたいなもん。とまではいかないのかもしれないが、痛みは任意の時点から麻痺してくるもんで、代わりに空腹のアラームがものすごいボリュームで鳴り響く。イメージが湧く。鰻、納豆、鶏の卵。イメージは夢想に変わって、食欲は理性で制御されんで、イメージがリアルに立ちあがる。唾液が止まんなく溢れ出して、ろくに水分を摂取してないので脱水症状に追い打ちをかけられ、意識は朦朧となつて、つらすぎてさつきからアイスじゃなくてカキ氷のことばかり考えてる。

京子と正史はいる。コンビニの前。

京子…何これ何何何？

正史…溶けたアイスでしょこれ。

京子…アイス？　アイスなんだ、あ、変に考えてた時間、いらなかった。

京子は指の爪をもみしだく。その場に落ちている小さなゴミ切れを摘む。

京子…これ、薬かなんかに変えてみせたらつか、いつかだけど、こんなゴミでも、薬に換えれるようにならんかな、ゴミそのものを薬へ変えるって文字通りでなくてもいいし、ゴミや薬っていうのは何かしら、言ってみればものの例えではないだろうか、自分の思いつきの言動にいちいち信頼なんて置いとけやんもんだし、もやもやする、こんな日はカレー食べる、いいカレー屋を知っているから、地下鉄代を払ってでも、食べに行きたくなって、駅の二番出口を降り、手を引っ張ってホームとホームとを渡す階段をぐいぐいと上って、目的地方面に向かう電車に乗るため、反対側のホームへと渡った。

おじさんと中学生はいない。

地下鉄の車内。

京子…帰宅ラッシュとぶつかってすっごい混み様で、ドアから車両の連結のところあたりまでを強引にかき分けて入っていったら、私のぶつかり方がどやら遠慮がなさ過ぎたようで、周りの乗客が睨んできて、だから意趣返しというか嫌がらせのつもりで、満面のにやけ顔をしたみた。

けれど客観的に見て自分はそこそこかわいいと思うし、なのであほ面しようがそれなりに艶っぽくなってしまうのだろうと思うし、というのも乗客の男は一発で私に恋焦がれた、二十才代前半の背広は心射抜かれて、背広の脳内でもないドパミンが放出されて、張っちゃって痛過ぎて突っ伏して、ぬるぬるも止まらないし、しんどく吐きそうに見えて、鬼でもないのに、鬼に金棒を抱えているのってほんとに辛そうだしかわいそう。

刺すような刺激ならば嘔吐するし、身長一五〇センチの私が見上げて凝視したのは、その嘔吐しかけてる背広ではなく、そちらではなく頭頂部が剥げ上がってる中年男性で、中年男性が凝視したのは週刊誌の中吊り広告で、黎明期から活躍し、このところはバラエティに出ずっぱりの、皮膚老化をハイビジョンで撒き散らす、年とったゴシップ女優で、傷害事件を犯したその女優の子供についての記事の見出しが、赤ベタ白抜きで、下の方にはその女優の顔写真が載っていて、その見出しにはこれといって特に思い巡らすところはなく、そっちはどうでもよかったんだけど、ただ、見出しを凝視している方の中年の放つた、強烈なマイナスエネルギーがとんでもなくてそっちがすごかった。

中年が掛けていた眼鏡に度肝を抜かされて、眼鏡がすさまじい汚染物で、下半分がまだらに濃い緑色で、アブラムシのような斑点で、不衛生さに胸糞悪すぎて、むせ返ったけど、どうにか耐えた。母の海を想い浮かべたので。

正史…地下鉄車内で、働いている勤め先の、チェーン展開している学習塾の生徒と鉢合わせた。

会話が続く中で、生徒が発した「社会保障」という言葉のポエティックさに反吐が出て、鞆からボールペンと、駅前の電気屋でもらった、プリンタのカタログを取り出して、家庭用インクジェットプリンタの昨今の著しい機能向上についての話に強引に持って言いつて、話題を変えた。

「社会保障」には何も思わないけれど、自由がなさそうなことを想起させる類の言葉は、生命のスープである母の海をまなざすように、何かしらに想いを馳せてしまい、侘びしく気だるくなる。

想いを馳せるのは、へ出て行かされる人へに対して。

母の海に流れるは目に見えないスープ。へ出て行かされる人へに想いを馳せるとき、その人が眠れない不安に心が痛んでくる。眠れない不安の元凶は、何もかもその、理由の目に見えなさ、にある。

京子…目に見えないほうがいろいろとラクでいいじゃん。

地下鉄が揺れに揺れて、京子はバランスを崩して、京子自身がびっくりして声が出ずる。正史はその上ずった声が不快で、鬱憤晴らして京子のわき腹をボールペ

ンで小突く。

京子…いた、なに、すん、の！

京子の声はかすれる。京子が眠たげなときのかすれ声。正史は鞆から耳栓を出す。京子は、車両の連結近くの座席シートにドシンと全体重をかけて座る。しばらくして、よだれと鼻提灯をたらし、大きないびきを響かせる。

正史…ふしだら。

よだれが揮発して、車内にツンと刺す臭気が漂った。情けなくなつて、いびき由来のうるささと臭さから逃れたくて、気を失いたくなつて、自分の首をのど輪締めして圧迫した。

熟睡していたと見えた京子が身を起こして、しかめっ面をする。

京子…さつき、ポエティックと言つてましたがー、ポリティックと言うところをポエティックって間違えて言つてしまったんしょー。

正史は京子が言うことに応えず、首の圧迫を続けて、意識を朦朧とさせてる様子で考え込む。

正史…ポエティックな問い、と、ポリティックな問い、とがあつて、初デートで多用するならどっちか、とか、へ出て行かされる人ゝが問われるならどっちならまだマシなのか、とか、へ出て行かされる人ゝのいた場所を巡り行脚して、人々に問うて廻るロードムービーを撮つてみたいとアイデアが思いついた。

まだ思いつきでしかないから、全体像が漠然としていて、全然、核、となるものを掴めていないから、構想をまとめるだけでも十年くらいザラにかかる気がするし、十年くらい時間をじっくりかけて書き上げた方がよろしいのでは、とも思うので、それにそんなのを企画としてどっかに売り込んだところで、門前払いくらいだろうし、だから自主

製作にならざるを得ないから自前でどうにか資金調達する他ないのだけれども、借金して撮るのは泥沼に入り込むので金はどこからも借りないこととして、パチンコでもいいし、とにかく自前で金稼ぐ。そんなことしていたら、金集めるだけで三、四年はかかると思うので、だから自主製作映画を撮りたいんだけど、どう思う？

京子はしかめっ面をしたまま。

正史…こんなこと問われたら誰であろうとすべからく、いい感じにしかめっ面になるから、そのしかめっ面を撮りたいわ。もう、へ出て行かされる人ゝなんてどうでもいいわ、その辺で撮ろう、ココイチでいいじゃん。インタビューと撮影のほとんどをココイチの店内でやって、編集も毎回インタビュー直後の店内で済ませりゃいいじゃん。撮影は記録のために使用するから公開することなんてない、とインタビュー相手には嘘ぶいといて、インタビュー後に一転して、やっぱ公開させてもらえんだろか、と懇願する。そんなやり方が具合良さそうだ。何十人とインタビューを敢行したのち、例えその半数以上から公開を拒まれたとしても、残る数十人は折れてくれるのではなかろうか。そして何かしら、決定的な何か、を発言する人がどこかで現れて、その人が公開を拒絶したとしても、役者を雇ってまんま再現させてもそれであっても十分事足りる。それをしなくとも、そもそも決定的な何か、が撮れたとき、その人は、公開を拒絶する判断能力なんて持ち備えているのだろうか。決定的な何か、を発言をするなんて、心身は衰弱してないなんて免れないのでなかろうか。その精神状態を体よく活用すれば、公開の許諾は造作なく獲得できる予感がする。

京子はいない。

おじさんと中学生はいる。

テーブルが少し離れてふたつ。一方には正史が、一方にはおじさんと中学生が横に並んで座る。

正史…撮影はiPhoneのカメラで十分だと思ったので、まずアップルストアへ行ってギガ数の多いiPhoneに新調した。

ココイチのみで撮影するとはいっても、さすがに一店舗のココイチだけで撮影するの

は不届き者なので、自宅からわりと近場で利便性の高いココイチを、四店舗ピックアップして、順繰りにいくこととした。

インタビュー対象者は、知人友人に限定しないで、ココイチにたまたま食事に来ていた見ず知らずの人に対してでも、勘でこの人こそは、と思う人にはダメ元で交渉試してみた。ほとんどの人から拒絶されたけれど、応じてくれる人もいた。

中学生が、乾燥したパン切れを鞆から取り出して卓上でこねくりまわして、それをおじさんがしかめっ面をしながら押し殺した声でぶつぶつ呟きながら叱責する。

正史.. おじさんは押し殺した声を数メートル離れたこちらの席へと、重低音を帯び響かせた。

おじさんから「尽くせる人には尽くしようよ」という言葉が漏れ聞こえた。その言葉はどうしてだか、僕のマインドにゴーサインを出して、反射的におじさんにインタビュー突撃してた。

正史がおじさんにインタビュー突撃する。おじさんは面食らったそぶりを見せて、しかめっ面がさらに陰しさを増して、正史を叱責する。

正史.. おじさんは僕を追い払おうとまではしなかった。おじさんは情念にまかせて僕を罵ったけど、そのうち、全て吐き出して憑きものが落ちたかのように、おじさんは平静を獲得して、多少は柔らかな顔つきとなった。

よほど日々の会話相手に事欠いていたのか、おじさんは息継ぎもままならず、むせ込みながら、泡を飛ばし世間への罵詈雑言を吐き捨てて、最初のほうは生活の苦しさと役所への不満をぶちまけていた。境遇の不幸を自慢した。

おじさんの話は脱線に脱線を重ねて行った。

おじさんと中学生... 限定的に論じた内部実行犯はハ蟹Vだった。甲殻類が特権的に持ち備える丸い節足部分、正確には球形と言うべきか。あまりに見事な「完全球」を持ち備えたハ蟹の兄Vの背後には、いつもハ蟹のおとうとVがくつついていた。

△蟹のおとうと△は△蟹の兄△の権威を傘としてふんぞり返った。生活力の乏しさは抜群で、いつも△調整期間中△と自室となっていた小屋の扉に張り紙をして、籠もりきりでいた。張り紙の下部には、「きかいじみたい」と鉛筆の弱い筆圧で書かれていて、周囲からは「きちがいじみたい」と書こうとしたのを書き損じたんだ、と解釈された。その解釈は幅広く支持されたものであったが、しかし△蟹の兄△は「機械化してからがなんぼのもんなんです」と概ねの解釈を一蹴して、皮膚剥き出しの自分の頭頂部をポリポリひっ搔いた。

△蟹の兄△の頭部は、金属部品＋ケーブル＋樹脂パーツで構築されたシステムが搭載されていて、精密機器が△蟹の兄△の頭部表面を覆う面積は、目を増すごとに拡大した。「ぶちのめす準備ができた」

小屋の扉にそうと書かれた張り紙があったのは、△蟹の兄△の頭部が完全に精密機器に覆い尽くされたのと丁度同じ頃合だった。

張り紙が見つかったとき、小屋はもぬけの殻となっており、△蟹の兄△の原付一台が忽然と消えて無くなっていて、△蟹のおとうと△はそれに乗って、どこかへ走り去ったと思われた。

余談だが、その場には、投げ捨てられていた金属片が、転がっていたのだけでも、それについても一応話しておこう。

△蟹のおとうと△は、菱形状の金属片を扉付近に投げ捨ててから、原付で去って行くと見られるが、どうしてそんなことをしたのだろう、このことに何かしらの意味が見いだせないだろうか、どうだろう。いや、あなたがわからないと言うのなら、そこまで深くは追求しない。やめましょう。

話を戻そう。それで「ぶちのめす覚悟ができた」と△蟹の兄△はすぐさま、別の原付に乗って△蟹のおとうと△の捕縛へと向かった。

小屋に残されたいたずら書きやいくつかの痕跡などから、△蟹のおとうと△は、どうやら小屋に籠もっていた最中に△呼吸法△へと傾倒して、△インド本来の呼吸法△を求めて旅立ったんだと推測された。

△インド本来の呼吸法△が様々な紆余曲折の果てに、今日の世間一般で嗜まれる、△なんちゃって呼吸法△の様態へと変貌したことで、その本来的な精神は、根っこから

引きちぎられ、ハインド本来の呼吸法Ⅴが壊死して、アブラムシがエネルギーに繁殖活動へと精を出したかみたい、誤ったものがむやみやたらに世に拡散した。

今日我々が目にしているハなんちゃって呼吸法Ⅴは、腐敗したハインド本来の呼吸法Ⅴの成れの果てのゾンビで、その悪魔的な吐息を嗅ぐことは、気が狂ったフェティズムでありマゾヒズムだ。グロデスクの体現であり、しかしながらそれこそが、否定できぬ人類の剥き出しの醜態であり、業だ。

運命とは数奇なものでハ蟹のおとうとⅤが投げ捨てた菱形の金属片は、ハインド本来の呼吸法Ⅴに涌いた微生物が、化学的法則に則って姿を変えたものと同じものだと言ってよくて、その化学的变化を説明する、理論があまりにもエレガントだったので、誰しもがそのエレガントさに打ちのめされて、涙腺が緩んで緩んで、涙が溢れて止まらなくなつて、うるうるして視界が遮られて、市中ではあらゆる乗り物の運転がままならなくなつた。ハ蟹の兄Ⅴの頭部に搭載されたシステムだけが、その涙を抑制する機能を持っていたので、我が物顔で原付をぶつ飛ばせた。

原付でハ蟹のおとうとⅤの捜索に出たハ蟹の兄Ⅴは、その折、統計分析から十数年後に起こるベビーブームを予測し、世間に警鐘を鳴らして、そのせいで、違う方向のプログラムへと持っていきたかつた政府からは睨まれることとなつたが、「私は反体制ではないですよ」と時の権力に潔白をアピールするため、ハ蟹雑炊詰め合わせⅤを政権中枢、与野党幹部に合わせて訳八五〇人、一人当たり三百セットずつ付け届けた。

付け届けに要した費用はハ蟹の卵Ⅴを売りさばいてどうにか工面して、ハ蟹雑炊詰め合わせⅤに必要となつたハ蟹Ⅴの身は、ハ蟹の兄Ⅴの親族の中で、比較的高齢で白痴な八千人に白羽の矢を立て、「生き永らえることの方が、あなた方にとっては、どちらかといや苦しみですよ」と論じて、身を捧げさせた。

ハ蟹のおとうとⅤはこの一件にたいそう打ちひしがれて、一〇〇日間、止めどなく涙を流した。一〇〇目に涙が止まってからは、反動でしばらくの間は、ドライアイが続いたけれども、あるときからまた再び涙が溢れ出してきたので、「また犠牲が出たんかい」と嘆いた。

実際にはこのときは親族の犠牲ではなくて、ハインド本来の呼吸法Ⅴの方に起因した涙だつたけれども、金属片のアレルギーによって引き起こした涙で、いずれにせよハ蟹のおとうとⅤはその涙が引き金となつてハ蟹の兄Ⅴからの永遠の別れをついにぞ決心して、小屋を飛び出して原付をギアチェン無しでぶつ飛ばした。

△蟹のおとうと▽は△蟹の兄▽と完全に袂を分かった。

△蟹の兄▽としては、「八人くらい犠牲にするだけで政府からの圧力が相殺されるならばめっちゃめっちゃに安上がりなもんだ、むしろ一番犠牲者が少なくて済むパターン」と捉え、それから懲りることなくベビーブームの啓発運動をまた再開した。しかし結局は当局からの不審や監視はほとんど排せず、△蟹の兄▽は顔色を伺い続ける毎日となった。極度の緊張が続いたままの日々の暮らし、政府への付け届けを滞らせなんてしなかったので、△蟹の兄▽がそれから死ぬまでの八年間で犠牲となった△蟹の兄▽の親族や関係者は、二十万人以上に上った。結果的に国家は労働力全体の三八%を失い、防衛能力が著しく萎えた。

それにつけ込まない隣国などあるはずもなく、この機を逃してなるものかいな、と周辺国が同盟を結んで外堀を埋めてよつてたかつての侵攻を始めた。侵攻によって海域の環境汚染が深刻化し、侵攻に乗じた乱獲によって△蟹▽の生息数は激減した。

半世紀ほど昔だったらもう乱獲されるといえばそりゃ△海老▽のことだったけど、今では△蟹▽の方が圧倒的に価値を生み出すようになって、乱獲された△蟹▽はなかなか合法的に捌けず、非合法の市場で盛んに取引された。

自ずと△蟹の闇市場▽が設けられて、巨額が取引された。マネーゲームによって世界の海上支配の勢力図はざっくり刷新された。

△蟹の闇市場▽が生まれて以降の世界のパワーバランスの中に生まれ育った今日の世代では、△蟹の闇市場▽以前のこと書かれたどんな書物を読んでも、果たしてそれが一体何の勢力図なのか、さらにはそれが何かの勢力図を記しているかどうかすら、判別がままならない具合で、それほど△蟹の闇市場▽は世界の均衡を瓦解させ、勢力構造を一変させた。

誰しもが方向感覚を失って、路頭に迷う時代がやってきた。

母の海を航海して、疲れきって自暴自棄となって、母の海のもずくとなり果てた

△蟹▽の親族は五十万を超えた。世界の混沌が△蟹▽のせいでもたらされた。

「うほほほほ h h h」

ハ蟹の闇市場Vの末端の末端の漁船で従事したハ船上の民たちVが嘔吐いたのは、悲しい記憶の一切がっさいを忘れ去られるコンビニのアイスという特効薬があつて、その副作用だった。

コンビニのアイスは悲しみと向き合い続けるハ船上の民たちVにとって、労働の悲しみに潰されないため、なくてはならなかった。

しかし、嘔吐き自体だって苦痛で、その苦痛によつて、さらなる悲しみが引き起こされたりもした。

しかし、その悲しみですらコンビニのアイスが掻き消した。コンビニのアイスによつて、悲しみが嘔吐きと因果しくなくなり、制限なく気管支は炎症した。

炎症の果てに、呼吸機能を喪失して死に至るハ船上の民たちVは、数え切れなかった。それでもコンビニのアイスを摂取しなければ、悲しみに押し潰されて精神を壊すのが関の山で、暴れ狂った挙げ句に仲間を母の海へ投げ飛ばしたか、自ら身を投げたか、辿る道はどちらかだった。

詰まるところ、コンビニのアイスを常用し、かつ気管支の炎症をも起こさなかった者だけが、わずかながら生き残る可能性が持てた。

ハ船上の民たちVの中でも、それぞれの特性で、嘔吐き声が重低音であればある者ほど、どういう訳か気管支へのダメージは小さく治まっていた。

かなりの年月が経過して、ハ船上の民たちVが世代を重ねて生存競争が繰り返されて行くほどに、響き渡る重低音は洗練されていった。

重低音のエレガントさこそが、母の海での生存競争を勝ち抜く、というより適者生存の最重要ポイントだった。

いつの頃からか、陸に暮らす既得権者たちの教養・嗜みとして、このハ船上の民たちVの重低音を楽しむがために、船を出して鑑賞に赴き、重低音を愛でて愉悅する習慣が定着していった。

ある旧家では、一族に生まれた幼い子息には通過儀礼として、重低音を洗礼のように浴びさせることが、代々の慣わしとなっていた。

その一族に生まれて、稀代の神童と誉高い、齢六つの幼子が、かつてない規模の旅団が組まれて、慣わしに従つて、母の海へと出航した。

幼子は旅の中で天才的閃きを、如何なく発揮することとなった。重低音がわずかに聞こえるか聞こえないかという海域に入った時点で、重低音がうまくやればエネルギー生

成に利用できる、と幼子の脳にアイデアは降って湧いた。

幼子は瞬時にアイデアから仮説を組み立て理論化し、船内で三日三晩不休で理論を構築した。一族秘伝の技でカモメを伝書鳩に仕立てて陸へ飛ばし、三日後には陸のアカデミアへ論文が送り届けられた。

論文が、あまりにまどろっこしい計算処理がこなされたものだったので、論文の査読には、その後最終的には八年を費やすこととなったが、その革命的な中身には、アカデミアの誰であろうと一目見れば、度肝を抜かされるものだとなった。

論文が届いた翌日にはアカデミアの選ばれし俊英たちによって、実用化を目した研究計画の骨子が、怒涛の勢いで組まれた。

翌月には第一号試験機が開発された。駆動させてみたところ、不完全ながらも、あまりにそれが効率的なエネルギーシステムであったことで、従来のエネルギーシステムがすべて、手回し玩具と同じ次元と思えなくなるほどだった。

理論を三日三晩で一心不乱に構築した幼子は、その時のあまりの集中のし過ぎに心身に過度の負荷がかかってしまい、後遺症が残り、重低音の耳なりが生涯治まらない身体となった。

一秒たりとも止むことのない重低音は、幼子の思考に干渉して、朝から晩まで重低音のことばかりを考えていなければ気が済まない心持ちとさせた。

言うなれば幼子は、重低音に恋をした。

効率的なエネルギーシステムの発見は、列強各国にエネルギーバランス均衡の崩壊を突き付け、安定したエネルギーバランスに基づいた安全保障の体制は瓦解し、各国のエリートは慌てふためいた。

政策立案に奔走した列強各国の実務レベルは、匙を投げたか、身を投げた。

私利私欲にまみれたエネルギー利権屋が、血みどろのどつき合いを始めた。

その一方で重低音を発したへ船上の民たち、当の本人たちは、そんなことにはまるで無関心だった。

へ船上の民たちへの社会では、重低音のエレガントさを発揮した固体を数多く生んだ

家系に対して、次第に名誉が付与されていき、その中で突出したハエレガントな重低音Vを発揮した一族が出現して、ハ船上の民たちVから崇められた。

ハ船上の民たちVからの尊崇の念を、神聖へと展開して、それを威としてその一族は歴史のうねりを勝ちくぐり、王家となった。

王家は同族交配のジレンマに陥ることもなく、重低音の才能溢れば庶民の血であろうとも、進んで一族に取り込んだ。

王家のハエレガントな重低音Vは、他の追隨を許すことが全くなく、重低音の神格の絶対性は揺るぎないものとなった。その破格の神格によって、ハ船上の民たちVには王家を頂きとした、確固たるヒエラルキーが形成された。

しかしその極端な交配、ハエレガントな重低音Vのみに力点を置いた歪んだ交配は、例え近親交配を回避したとしても、遺伝子の偏りは免れず、あるときから重低音を発せ無い個体がいくらか発生するようになった。ある一点のみ重低音とは全く異なる性質の個体が現れ始めた。

それはソプラノ声だった。

王家が追求し続けた重低音の希求があまりに真摯過ぎたから、神に厚かましく思われってしまったのか。よりによって、ソプラノなんか一族に産み落とされるとは。重低音を、重低音を。ただ純朴に一途なる心で追求してきた。なぜ、どうして王家がこんな苦しみを負うのか。

ソプラノは王家のみから、数年に一度、ランダムに発生した。ソプラノの個体は、重低音を発せないにも関わらず、気管支は全く炎症を起こさなかった。

この炎症を起こさないハ健常なソプラノVは、王位に君臨した者Ⅱ王が、伝統的に発した最上位にハエレガントな重低音Vとともに、畏怖された。王家のみから生まれるハ健常なソプラノVは、あまりに奇怪と、ハ船上の民たちVから恐れられた。

ハ健常なソプラノVはもうひとつの畏怖の対象となった。ハエレガントな重低音Vとハ健常なソプラノVは、不協和音となるのは仕方なく、激しい混乱と対立が生まれた。しかしその後いくらかの月日の経過で、混乱や対立は次第に収束へと向かい、緩やかに、穏やかに、緊張を含んだ協調に変調した。

それ以後、ハエレガントな重低音Vと、ハ健常なソプラノVとが、太陽を上目遣いす

るハーモニーを織り成す、ふくやかな時代が続いた。

現代の理論化された音楽とは、このハーモニーへの片想いだ。渡り鳥の鳴く声は、
へ船上の民たちゝのえづき声から音楽的エッセンスだけを抽出したものだ。港あたりで
くだを巻いた飲んだくれが、その渡り鳥を真似た、それが音楽の起源で、いまではそれ
が駅のチャイムにも：

正史…話にクラクラしてきて、メモを取るためボールペンを握りしめた指は、紫に変色
した。

今ビデオに撮ったものは公開すべきでない。視聴したら精神に裂け目が入る。あまり
にも支離滅裂で、気が狂ったとしか思えない、それでもいまこのおじさんは、決定的な
何か、を語った。

極度の不安に置かれてしまった。不安を払拭しようと、チーズカレーを追加注文して、
店員がテーブルに皿を置いたコンマ二秒後に、危険度が高い高熱のチーズカレーを一気
に飲み込んだ。

口と咽が火傷した。激痛が走ったが、それでもまだまだ刺激が足りなかった。

今しがた、おじさんの話から受けたショックを、何かで上書きしなければ、心に傷が
残る。しかし、この火傷の激痛ですら、まったく何にもならない。太ももにボールペン
を突き刺すとか、店員の眼球を引っこ抜いてそこにチーズカレーを流しこむとか、何か
いい手はないだろうか、

京子はいる。

京子…アイスばかり食べて、甘いものへの依存症を抱えた青春を過ごして、依存症か
ら脱けるため、高熱のチーズカレーを飲んだことがあった。その効果は抜群で、それで
禁断症状に打ち勝つタフさを身に付けた。

タフさが身に付いたら、おかしなほど欲情するようになって、そしたら子が欲しいと
思うようになり、それならばとしっかり身を立てないといけないと思うようになり、依
存症のこれまでを猛省し、改心がしたくて猛勉強して、専門的な教育をするすると通過
して、挙句の果てには国の機関の研究職へと着任し、甘いものへの依存に陥る原因とそ

の対処の解を突き止めたと思った。

時間は有り余ることなく、限られた。研究者同士で異なる宗教観で論争したりと、しばしば時間が無駄に奪われてしまったりしたからだ。

運命のあり方を記述的に論じ合うことに依存する学術では、研究機関で同僚や職員と折衝する無意味さに、事あるごとに苛まされ、議論においては防戦一方の惨めな具合で、相手にするのが時間の無駄でしかない論者たちが、にわか知識で運命論を振りかざして意気がつてきた。

もうやめよう、人など高尚でなく単なる肉ですよ、自己増殖にやつきとなる肉の塊だから。

にわか知識の論者たちは激昂して、人事部事務室へ駆け込んで、そうすると人事部職員は、ペナルティの意味合いで不必要で煩雑な事務仕事を課した。

そんな日常で、研究機関施設内に設置されたスーパーマーケットに日々通った。

多種多様の生物の死骸が取り揃えられた、店内の一角では、海産物などの一部の生命は死なずしてまだうごめいていて、その場で命を刈られた。

救済の叫びなどは無視して、ペットボトル烏龍茶を買う。これもまた死骸の茹汁だ。

サツカリンの研究プロジェクト（仮）の現場へヘルプとして入ったとき、真っ先にサツカリンの研究などナンセンスだ、と言い放った。

サツカリンの研究などナンセンスだということは誰もがわかっていることで、わからない者など一人とていない、例えばあるプロジェクトでの実験台はサツカリン依存症の、その人をハサッカーファンAⅤとしておくとして、ハサッカーファンAⅤは、サツカー好きが高じて、サツカーと言葉の響きが似ているからとして、サツカリンが頭から離れなくなつたという。サツカリンの言葉の響きに引き寄せられて、サツカリンに手を出し常用したときからハサッカーファンAⅤは怒りと悲しみとが同じ感情となつたというので、なんでそうなつたのだろうか、少なくとも言えるのは、それはサツカリンの薬理作用でなくハサッカーファンAⅤの心理的な変化でしかない。

ハサッカーファンAⅤはファーガソン監督を特別に崇拝するハファーガソニアンⅤとの自認があつたがために、プレミアリーグのゲーム中継の監督が映った瞬間をつぶさに観察、表情とうごめきなどから彼の生き様がどうであるのかを解釈して読み取り、自らの生活行動の模範とした。

ハサッカーファンAⅤの心の様態を分析するにしても、怒りと悲しみの同一化を一体

どうやって科学が解明すればいいのか、そもそも怒りと悲しみとが同一化して、生きて何か問題があるのか、その状態がサッカリンと因果関係があるかを見いだすのは無理で無意味だし不可能で、上が求めたがる報告をするのは素直な仕方ではやるしかないならば、無茶難題だ。

それにも関わらず、サンプルとして研究機関が活用し易いのはサッカリン依存症者なのだ、なぜならば上、つまり研究を支えるスポンサーである大々大資本家が、その本人こそがサッカリン依存症だったから、正確には、彼もまた自分がサッカリン依存症だと自認する、という心を患っていたからで、症状はハサッカーファンAと同質のものと見られていたが、誰すらも診察した訳でもないで、本当のところは知る由もなく、むしろそんなことには誰もが無関心で、サッカリン依存症に関連すると前面に押し出して上に向かってプレゼンテーションしさえすれば、なんであれ容易く研究費が獲得できた。しかしそうやって得た研究費は、サッカリン依存症研究と見せかけた、その実全くそうではない、各自のやりたい放題の研究のために、みんながみんな活用した。

上が国に動いて、サッカリン依存症研究の障害となるような多種多様な法的規制は著しくゆるゆるとなったし、大衆がサッカリン依存症者に同情心を掻き立てるようにと、いろんなメディアに手を突っ込んだ。研究予算のルールに則った私的横領を目論もうとした、予算は十二分に獲得できた、しかしプロジェクトを進めていく中で、事実上の詐欺をしていることの後ろめたさが小心者には拭え難く、その上激務が重なってワークライフバランスを崩した。

プロジェクトに参画した誰も彼もが、各自、対人関係をどことなく悪化させた。間もなくして殺伐とした雰囲気成熟させた挙句に、プロジェクトは行き詰まって、プロジェクトに加わったものは大なり小なり、心をぶっ壊した。

心の破綻者たちは、憎悪の気持ちに蝕まれ、ルサンチマンの発散の標的としておあつらえむきのハサッカーファンAに八つ当たりの矛先を向け、ハサッカーファンAの治療のために重要な実験、と嘘偽わり、そこからはリンチをし始め出した。堕ちた研究者たちは、ハサッカーファンAに効果的に心理的苦痛を呼び覚ます手法をこぞって、熱心に突き詰めて共にわかちあった。

この体験で得た、よってたかってリンチすることの気持ちよさ、爽快感、欲びや一体感によって、研究者たちのいくらかは解脱できたと言って差し支えない、魂の刷新が成され、リンチと同じ浄化作用を、他の全然違うどこかにも求めようとして、リンチの効

果を平和的に転用するアクロバティックなことだつてできるんじゃないかなろうか、と毒を薬に変える、倫理にすら適合するリンチの応用を、試みようとするいかれた奴らも現れ、そいつらは研究に没頭することで、リンチへの渴望を収まらせてもいたが、そいつらの働きによつて、革新的な手法が、いくらか開発された。

リンチで生ずる強い心的エネルギーを、合理的に転用する術が見出され、それは人間の負の精神を、正の精神に転用して活用する画期的な方法論であつたが、しかし言つてみればそれは、翻つて言うならば、そもそもリンチがいかに効果的にエネルギーを生み出すパフォーマンスが高かつたものたるかを、明白に証明した訳でもあつて、それなら別にリンチそのものでいいじゃないか、と体育会のノリが強すぎる国は、待つてました、とばかりにまどろっこしい転用などわざわざしないで、リンチをそのままリンチとして、大いに国全体で推奨し、負だらうが正だらうが、大きな心的エネルギーさえ生まれればそれだけで十分で、たぐさんのリンチが国内のそこかしこでとんでもなくエネルギーを生んだ。その結果が出たわかりやすい数字を挙げるとするとして、膨大なオリンピックメダルの獲得数はまさにそれだ。

正史…メダル取るつてのはまあそういうことなのかもしれないね。

京子…法的なちゃんとした手続きも捌けんなんて、メダルに目がくらんで、そんな国家に加担するやつ職場なんて打ち壊してこい！

正史…そんなことしか言えんのかよ、ふざけんな！

京子…ふざけとらんし、それしかないじゃん！

京子と正史は口論する。顔を近づけて口論するので、京子の酸っぱい口臭が、正史の鼻腔を刺激する。正史は嗚咽して涙ぐむ。

正史…口は臭い、世の道理はわかり得ないが、口は臭い。

おじさんと中学生…アリゾナ州の昼下がりで日焼けしたいな、と思うのは背広を着込んだハ鬼に金棒Vの人達。

へ鬼に金棒Vのこれからの展望と、展示会・見本市での構成をどうプランニングするか、をアドバイザーとして引き受けたへ鬼に金棒A Vは、変貌を遂げたへ鬼に金棒Z Vの噂話を耳にした。

噂を検証しようもなく、何も決定打となる確証がない。金食い虫と揶揄されるへ鬼に金棒Z Vは、その実態は食えない二面性を持ったしたたかな野郎で、無碍にできなかった。

へ鬼に金棒Z Vが会場で咄嗟にアイデアをこしらえて、趣旨を一から見直すべきだ、と力説したことについては、評価されて然るべきだ。そこで彼が殊更強調して主張したのが、タブーは犯すもんじゃないということだ。

タブーは犯すもんじゃない。今はいいと思っても、十年後、二十年後にトラウマになつて自分を蝕んでくるぞ、トラウマと抗するために、陽の光を浴び続けて幸せホルモンを出して意欲を出し続けて乗り越えるしか、無理だ、しかし都合よく現実には運ばないんだよ、なぜなら三六五日、一日も欠かさずに陽の光を浴びてなければならぬのだからそんなの無理でしょ、タブーって言うのはそれだけメンタルにくる社会的な圧力だから、対人関係を保つ以上、のしかかってくるよ、対人関係をなくして生活なんて送れないでしょう、いやいや麻痺しない麻痺しない、決して社会的な圧力に慣れたりとか、不感症になったりなんてするもんか、そんな都合のいい話はない、無理だ諦めな、別に脅している訳ではないんだよ、忠告してるんだから、タブーを犯したツケはめっちゃめちゃでかいんだから、陽の光に当たり続けるって無理だろ、日の出から日没まで炎天下にいて、心身が正常に保つわけがないし、極度のマゾヒズムでないとできないし、そもそもがトラウマとマゾヒズムは相性が悪過ぎて、同居なんてできっこなくて、理論的にも崩壊していて、更にそもそも話として、雨の日はどうするの、曇りの日はどうするの、台風の日はどうするの、わかるでしょう、それだけでもう無理なんですよ、三六五日かんかん照りが続いたとして、それでやつとこさ成立する話なんですよ、三六五日、途切れなく陽の光を浴び続けて、放出される脳内活性物質のポリウムでどうにかなるかならないかの計算なんですよ、現実にはありえない、火星にでも住まなきゃできっこない、わかったでしょ全然不可能でしょ、トラウマには抗えない、トラウマを抱えてひもじい思いをしてまで生活したいのか、そうですかそうですか、あなたの情熱はそんなことになつていいのか、涙をぐつとこらえて考え直せ、外は寒いから、外で頭を冷やしてこい、とまでは言わないけど、気分転換に散歩でも行ってきたら、とは言いたい、どちらにし

ても外へ出るよう促すことには違いはないけど、うまいこといざなえたらそれにこしたことはないね、七割八割くらいで成功して過ちを思い留まらせられる、機転が利く十歳以上も歳が離れた人間の未熟さを、愛おしいと捉えられるか、ただ苛立ちとしかならないか、美味い話なんてどこにも転がってなんてないのだから、すべからくひもじい思いをするに決まってるし、南の事情がほとんどそうで、アリゾナ州から南に向かった偵察隊は、誰一人として穏やかな心で帰国できなくて皆、帰国したらずっと部屋の間で体育座りのまま動けなくなるのよね、そんなところにバーボンなんて強い酒を与えてしまうと取り返しがつかなくなる、だから南から帰国したアリゾナ州出身者は、生涯を通じてバーボンを目にするにすら危ない行為となり、徹頭徹尾、周りの人間は、バーボンを彼らの目に触れないところに隠しておかねばならないし、バーボンと語呂が似かよった言葉も発してはならなくて、パーマンとか、ばたやんとか、ザーボンとかドドリアとか、バーボンと似て捉えられてもおかしくないワードに、過度に慎重とならねばならなくて、途方に暮れちゃって、途方に暮れた挙句、暴飲暴食を止められなくなり、卑屈になって、それでも暴飲暴食は止められない、ろくなことがない、母の海へも行けない、道を歩いても誰もどいてくれない、不貞寝し惰眠の鬼と朽ち果てて、学があるかないかに関係なく朽ちて、不貞寝をしても嫌悪されないような人付き合いをどうにかして構築しとかなないと、その先にもっと厳しい局面に立たされて、控えめな言動ばかりで場の空気を害さずに平々凡々としていて、印象が薄くなって誰も名前も顔も憶えてくれなくなつて、名前も顔も憶えてもらえない代わりに、しっかりとした体格です、と肩幅が広がってがっしりしているところばかりに目をつけられる。

　　へ鬼に金棒Aは、肩幅の広さが尋常ではなく、地下鉄に乗って会場へやってきたという男女のカップルが、面白がつてへ鬼に金棒Aの真横に、肩幅の広さ具合の化け物ぶりがよくわかるよう、比較対照できるようにと、三人並んで写真を撮る。

　　三十枚くらいシャッター音が鳴って、最も肩が張って見えるその一枚が公開用にピックアップされる。体格が良くて肩幅が広くて、パンパンに張っている肩の持ち主として、キャプションを付けられ晒されて、人々の記憶に残そうとする。

　　へ鬼に金棒Aは、魚を捌くキッチン周りの整理整頓が、来客からいつも褒められる。マメにシンクを磨いているので、光沢が出て麗しくなり、水周りの環境美化に貢献する。

正史…その肩幅はキッチン周りを磨く毎日の成果の賜物なんですか？

おじさんと中学生…カップルの男は麗しいシンク周りの輝きを目の当たりとして、維持管理する。鬼に金棒Aの労力を察して、度肝を抜かれて驚く。

カップルの男は電卓を取り出して、演算をはじき出した数字を見せる。この倍の価格でも買うから売ってほしい、とせがむ。

まもなく生臭い匂いが立ち込めて、その源は、一世一代の大博打に出た極度の緊張状態におかれた、カップルの男である。緊張状態によって、雑菌を培養させるタイプの汗と皮脂とが吹き出して、臭いを放つ。

刺激臭が強まるにつれ、男は、シンクの光沢にますます魅入っていく。カップルの男の言動が、うざい上に、臭い上に、目つきがどんどんおかしくなっていく上に、そのくせ肩幅の広さについては全く関心を見せずスルーするので、鬼に金棒Aは、はらわたが煮えくり返る。

とは言えこのままの緊張状態がしばらく続いたら、このカップルの男はぼつくりと逝ってしまうかもしれない、と鬼に金棒Aは考えて、その上で四、五分待ってみた。五分過ぎて、六分過ぎて、十分過ぎても男はこと切れないが、しかし緊張状態は加速度的に高まっていき、血管は浮き出て、破裂しんばかりに浮き出て、しかし破裂することなく血管が身体から飛び出して、太い血管も細い血管も入り乱れて、ポトッと床に落ち、生臭さを放つ。

正史…ごめんなさい、集中して力入っちゃってなんか飛び出しちゃいました。

おじさんと中学生…これだ！　と思つて　鬼に金棒Aがアドバイザーとして提案したのは、「バキバキ！鬼に金棒Vだらけの水泳大会」で、今年は節目だからと、特別ゲストで鬼に金棒Zを呼ぶこととして、水泳大会全体の予算が百万円なのに、鬼に金棒Zのギャラだけで百二十万円も使ってしまった、元々の予算を遥かに超過して、そのしわ寄せで、あらゆる他の予算を削り落とすことになってしまった。

プールに張る水の経費も捻出できなくなつて、それではあんまりだ、との声が上がつて、液体なら何でもいいからとにかくプールを埋めようよ、と打開案が出て、鬼に金棒Vたちは一斉にプールに液体を放つ。

とんでもない香ばしさが立ち込めて、吐き気を催して嘔吐く人が続出する。

嘔吐いて出た物は液体か否か、激しく議論される。議論の行き詰まったあたりで、委員長と名乗る人物が、持論を説き始める。

「母の海つてのはこんなような匂いだったよ、液体の匂いだけでない、少し固形物も混じったこんなような匂いこそが母の海の匂いなんだよ、我々の祖先たる魚類をこのプールで泳がせてみたい、母の海のように、泳いで泳いで泳ぎ倒して、そうしていつしか陸に上がったのだから、プールサイドに上がろうとする小魚もいつかは出てくるだろう、進化があるかもね」

委員長と名乗る人物の独り語りは喝采を呼び、賛同した誰がしかによって、コンビニのアイスがプールに投げこまれる。

「鬼に金棒Z」はこの行為にカチンときて、アイスでは泳げない、と激昂して、アイスをプールからすくえるだけすくい出して、プールサイドへ叩きつける。

プールサイドは溶けたアイスで浸される。しかしプールの中へ投げ込まれたときに、どっから紛れ込んだのかは宇宙の神秘だけれども、いくらか魚の卵が混じり込んでいて、そのせいで予定通り、進化のスイッチは押されてしまう。

委員長と名乗る人物の言ったとおり、進化が始まりだして、肺ができて足が生えて、稚魚はプールサイドへ上がろうと試みる。奇跡的にプールサイドへ上がることができた稚魚が、プールサイドを浸すアイスのぬるぬるのせいで、滑って転んでプールサイドに頭を叩きつけて脳天をかち割る。「鬼に金棒Z」が滑り倒して脳天全部がプールにドボン。

脳味噌が飛び散る。方々でかち割られて脳味噌が飛び出て、飛び散る。プールサイドはアイスと脳味噌が、六対四で混ざり合う。

これぬるぬるして気持ちよさそうだけど焼いて食ってもうまそうっすよね、とあちらこちらから唾液をすする音が聞こえ始める。

実家に七里を取りに行ってきた「鬼に金棒A」が、焼いて食べてみたらあまりに美味で、ご飯を炊いて乗せて食べたらもつと美味で、「鬼に金棒」たちにサービスで振る舞ってたら好評で、噂を聞きつけ、「鬼に金棒」では全然ない人達も集まってくる。食欲を誘う海鮮の香ばしさが漂う。

商売の形態にしないと、人を入れないと手が回らなくなるほどの好評で、商売とした途端に売上がうなぎ登りで、井一杯の売価を三八〇円と設定して、馬鹿みたいに売れる。

生産が追いつかなくて、環境を整えるためにプールに大量にアイスを押せ押せで補給する。

生産のサイクルが面白いように回りだして、利益向上の勢いは止まることを知らず、
へ鬼に金棒ゝたちは皆、背広を着込んであちこちに営業周りに出向き始めた。

京子…酒の肴ってほんとのところ、知らなかったらただグロいものにしか見えないよね、
どっから飛び出た何者なのか、とか全然わかんなかったりするし、これ何なの？ 内
臓？ 脳味噌？ もっと変な部分？ そもそも魚？ 海なんてほとんど行かないし、魚
もあんまり食べないからよく知らなくて。

山の手の軽薄な価値観に飲み込まれて育ったから、休日は山登りだハイキングだ、
キャンプだと、都市部の人間らしい似非アウトドア趣味にかまけた、だからどちらかと
いえば山側にシンパシーを感じる派の人で、海側のジャンル、マリンスポーツとかは、
やってみたいなんてひとつも思わなくて、どちらかと言えば山、と言うには言うけど、
山へ赴いても、音楽プレーヤーを手放さないで、親からも受け継いだダンスサウンド趣
味をガンガン流してる。

ダンスサウンドがあるだけで、体幹の軸がしっかり取れて、山を歩き通しても、そこ
まで身体が疲れなくて、そんな生活スタイルを続けていたら、鍛えられた私の、見るか
らに体幹のしつかり取れた立ち姿が周囲の人びとを図らずも魅了するようになり、体幹
をどうやったら鍛えられるんだ、と事あるごとに方々から尋ねられるようになった。

面倒くさくなって、そういう靴下履いてるんすよ、その靴下だとフットワーク軽く動
けるようになるんすよ、と方々でうそぶいていたら、誰も彼もがそう言うて煙に巻かれ
る、と言うより、そこより先を突っこんで来なくなって、厄介払いができていた、しか
しあるとき正史という奴が、体幹を整えたくて仕方がないのでと、どこで話を聞きつけ
たか知りようがないけど私を訪ねてきて、その正史という奴に、これまでと同じように
適当なことでもうそぶいたら、へえそうなんですかと何の疑いも抱かず信じてしまつて、
その靴下ってどこで売ってるんですか、としつこく聞いてきて、ダイソーかセリアで適
当な靴下をいくつか買ってきて、それを正史に三万円で売りつけた。

靴下を履いてからの正史は嬉しそうな表情をするようになって、気がよくなったのか、
身の上話を始めて、正史は、若い時分は法律職を生涯の仕事として目指そうと目論ん

でいたけど、引越しのアルバイトで腰をすこぶる悪くして、長時間机に向かうことができない身体となってしまったがために、デスクワークはあらかた今後ずっと不可能だと思切りつけて、挫折を余儀なくされたということで、それでも腰が少しでも改善に向かうならば、何だって試そうと手を出していたとの話をして、それを聞いて、プロではないにしても、法的知識に長けた人物が身近にいるのはそんなに悪くなくて、それなりに便利かもしれないな、と企んだ悪い顔をして、靴下より山登りをすればもっともつと腰よくなるよ、と正史を山登りへ誘った。

正史は山登りの最中、私の体幹の、あまりにしっかり取れたシルエットに惚れ惚れしたらしく、正史の腰は山登りのせいで、むしろ余計に悪くなったようで、腰が痛くて泣きながら、それでも山を登っていて、これは流石にだめだ、と山登りに連れて行ったのはその一回こっきりだったけれども、それからなんだか悪いこととした気持ちになんとも拭えなくて、正史とちよくちよく会うようになってしまった。

その山登りのときぶりに涙ぐんでる正史を見て、けつたいな顔しとるなあ、と思いがらもなんだか情念が疼いてしまい、頬を伝う正史の体液と、ぐしゃぐしゃに歪んだ顔に久方ぶりに思い入ってしまった、絆の回復、もしくは傷の舐めあいという言葉が世の中にはあるので、それに乗っかってみよう、と思って正史と私とで、二泊三日で北陸の旅行へ出かけた。

旅の夜、小さい頃に二泊三日の家族旅行で家を空けたことで、プランターの植物を枯らして廃棄処分した記憶が蘇って、この男はその家に置き去りにしてきた朝顔ではないか、とわかってしまって、枯れるほど涙を流した正史を、旅行から帰ったら捨て去ろう、と決めることにした。

旅先の宿の真夜中、正史は寝ていて、アメリカ大陸を女二人が車で旅するアメリカ映画をテレビで見たけど、その種のジャンルのテンプレ化した、アリゾナだかニューメキシコだかユタだかテキサスだかカリフォルニアだかの、荒涼とした砂漠の地平ばかりが見せられて、咽が渇く気分になって、ミネラルウォーターを飲んだら、春の草花の生い茂った瑞々しい日本の景色が懐かしいな。

春先に合う歌謡曲を口ずさみ、花を摘んで押し花でもしたくなって、砂漠のシークエンスよりも、ブラウン管の砂嵐の方が、どちらかと言えばまだ風情を感じられたので、お前はどうかんだ、とちら見してみると、正史は真っ只中の熟睡中で、アメリカに行く

ならばアリゾナ州がいいな、と思ったあたりでアメ車が崖を飛び越したし、リモコンを画面に投げつけたった。